

卒業生訪問 海外生活 体験記

1988年8月～1991年11月

フランス滞在

「南仏プロヴァンスへ！」

●家政学科3回生 榊原 敦子

「十年一昔」と言いますが、二昔も前の話で恐縮です。1988年、住民票の抹消、国民年金の処理、教育委員会へ転出の手続き等々を済ませて南仏のカンヌ



へ出発。日本からは最寄のニース空港まで約15時間のフライト。カンヌ映画祭が開かれる華やかな街です。気候は地中海に面し穏やか。しかし年に3～4回はミストラルと呼ばれる台風並の強風が吹く。

夫は数カ月前に赴任していましたがまだアパートも決まっておらず不動産屋めぐりの日々。築150年位の古き良きフランス的な住まいから近代的なものまで色々見ることが出来良い経験だった。「滑り込みセーフ」という感じで住まいの決定と娘の学校の新学期が始まった。フランス語も分からないまま現地校「リセ・サンマリー」の6年生に編入。

学校は高い土塀に囲まれ登下校の時間だけ小さな門が開かれるというもので普段は中の様子も伺うことが出来ない。しばらくは緊張の連続。子も親も。現地校に慣れてゆくのはゆっくり一歩一歩だった。

今日この頃のようにインターネットで世界中の事柄がリアルタイムでという時代ではなかったので日本の情報源は夫が会社から持ち帰る一週間遅れの新聞だった。あれほど新聞の隅から隅まで興味を持って読んだ時期は後にも先にもない。当時ベルリンの壁が崩壊し、昭和から平成に、また湾岸戦争勃発と大きく世界が動いた。

渡仏3ヶ月程して中古のルノー・サンクを手に入れてからは学校の送迎、水などの重い買い物はもちろん、行動範囲もぐーんと広がった。運転のルールは無秩序のようで秩序があり慣れれば快適であった。

一般的に治安が悪い、失業率が高いといわれながらも私たちの周りにいたフランス人達はユーモアがあり親切で何よりも生きることを楽しんでいるように見えた。親しい人とおしゃべりを楽しみ真夜中まで続く事もあるホームパーティを何度か経験した。

おかげ様で心と体の健康に恵まれ多くの印象派の画家が見たのと同じ燦々と降り注ぐ光と風の中に生活出来たことは本当に幸運であった。



2004年4月～2006年12月チェコ滞在

●家政学科6回生 小林 ひで子

主人の赴任先はチェコ。私にとって初めての海外生活。私達二人の第二の新婚生活はHavlickuv Brod、人口25,000人。首都プラハから120km離れた町で“工場立ち上げ”という仕事が主人を待っていました。

そこでは私は初めての日本人女性。チェコスロバキアという名前しか知らず、二つの国に分かれ4カ国に囲まれている事も知らず、英語を話す人も殆んどいない町。初めて耳にするチェコ語。英語を介してのレッスンが始まりました。本当に難しかった。3年在住と云うと、チェコ語ペラペラと思うかも知れないけれど、とんでもない!!苦悩の毎日でした。自分の意思が伝えられるようになったのは2年くらい経ってからでした。



冬の1月・2月は雪の季節。家の前の歩道で人が滑って怪我をすると住人の責任なので、毎日塩をまいたり雪かきしたり。幸いなことに軽い雪なので私にも出来ました。1時間もすると汗が出て来ます。朝の忙しい時、雪に車がはまって動けないと隣人が出て来て手伝って下さったり、昔懐かしい気持ちの持ち主達でした。

私の一日の生活は主婦。日本食好きな主人の為に、日本からの訪問客には日本食材を運んでもらいました。町には食材がなく、プラハでも日本の3倍高い!チェコ人は、内臓・豚の脂身などを食べる習慣があるので助かりましたが、魚は冷凍の鯛・鯖・サーモン。チェコの食材を使っただけの毎日でした。こうした生活が3年弱、のんびりした景色とゆったりと流れる時間。誰にでも挨拶し、年寄りを大切にする習慣。もう少し長く住みたかったと思う良き体験でした。

